

八戸ブックセンターのこれまでとこれからについて

金入健雄 カネイリ

本事業スタートにあたり、八戸市内書店三社による組合組織である八戸書籍販売LLPでは、書籍の仕入れ業務等についてお手伝いをさせて頂いてきました。書店業界の現況は、コロナ渦における家中需要の増加とコミック等の一部ヒット作に恵まれた事による一時的な売上の増加があったとはいえ、書店数自体は年々減少の一途を辿っています。

ブックセンターがオープンに向けて動き出す前、書店を経営する立場として感じていた事は、「書店とは地域における知のインフラであり、その土地の文化度を測る指標となる」と言われてきたような時代は変わり、もはやそのような地域における知へのアクセス経路としての書店の性質は一民間の事業者だけでは担保しきれない市場環境となっているのでは、という思いでした。

そんな中新たな公共サービスとして生まれた書店の形式をとったブックセンターの存在は、ますます重要になっていると感じています。ブックセンターに並ぶ様々な本の連なりは、大袈裟にいうならば人類の英知の結集です。総覧性と偶然の出会いに溢れた書店での本の購入という、古くも新しいここでしか得られない価値体験を通じて、地域においていつでも気軽に体系化された知の入口を開く事ができる。且つそれが高い専門性を持って編集された状態で、しかも購入という形式を取る事で、電子書籍のサブスクリプションサービス等の普及が進む中でも持続可能な、本と地域に住む私たちとのオルタナティブな関係を提示しているのではないのでしょうか。

オープンからの5年間、SDGsをはじめとする経済活動に止まらない社会目標の広まりや、多様な価値観を認める社会へと変化が進む一方で、デジタル封建主義の様相を呈する巨大企業のグローバルな経済活動は、社会をより便利にすると同時に社会の均質化を進め、人の働き方や暮らし方について、私たちが本来持つべき暮らし方や働き方に関する自立性を、見えないデータの渦の中に取り上げていってしまっているように感じます。

この数年で明らかになってきた事の一つは、人は市場原理にまかせた社会・経済活動を行っているだけでは真に豊かにはなれない、という現実です。私たちは、ただただ競争に身を置くのでは

なく、自らの暮らし方や働き方へと自立性を取り戻し、地域に暮らす私たちにとってこれから必要な事を、より自由に多様な価値観をもって自ら構想していく必要があるのではないのでしょうか。そんな時、本はいつでも私たちの側に在り、新たなインスピレーションをもたらしてくれます。地域の豊かな未来を創るための可能性が、その書棚には所狭しと並んでいるのです。そんな八戸ブックセンターのオープン5周年を、心からお祝い申し上げます。

金入健雄 takeo kaneiri

カネイリ

パワープッシュ作品『「ついやってしまう」体験の
つくりかた』刊行記念セレモニー(2019)

1980年八戸市出身。株式会社金入代表取締役社長。東北スタンダード株式会社代表。せんだいメディアテーク、八戸ポータルミュージアム、八戸市美術館にてカネイリミュージアムショップ運営文具・書籍・工芸品などのセレクトを通し、東北の魅力を発信している。

